

# 第3回サツマイモ基腐病の現状と対応に関する 情報交換会（R4.3.28）のレポート

日本いも類研究会 事務局長補佐 はしもとあゆき  
橋本亜友樹

## 1. 概況

令和3年度内最後のサツマイモ基腐病の現状と対応に関する情報交換会（以下、「サツマイモ基腐病情報交換会」という。）として、第3回目は防除技術の普及に向けた、最新の令和3年度版の対策マニュアルの改定内容に関する説明を中心とし、また、開催までに質問を募集し、寄せられた質問に対する研究者の方からの回答を実施することにした。

前回に引き続き、Zoom ウェビナーによるオンライン開催で実施し、鹿児島県、北海道、茨城県、宮崎県、徳島県、千葉県を中心に全国36都道府県から、事前の申込みが208件、当日は約180拠点からの参加があった。

### ●開催概要

日時：令和4年3月28日（月）

13：30～15：30

場所：Zoom ウェビナーによるオンライン開催

主催：日本いも類研究会、日本かんしょ輸出促進協議会、一般財団法人いも類振興会

参加者：主催団体の会員他、前回参加者へのメールや日本いも類研究会ホームページで告知

進行：座長：日本いも類研究会会長  
小巻克巳

講師：農研機構 九州沖縄農業研究センター 暖地畑作物野菜研究領域 畑作物・野菜栽培グループ 上級研究員 小林 有紀

鹿児島県農業開発総合センター 生産環境部 病理昆虫研究室 室長 西 八束

宮崎県総合農業試験場 生物環境部 部長 櫛間 義幸

パネリスト：九州、関東のJAや生産・加工・流通に携わる法人の担当者、研究機関や行政の担当者等

## 2. サツマイモ基腐病情報交換会の内容

当日の司会進行は日本いも類研究会事務局長補佐の橋本が行った。座長をお願いした日本いも類研究会の小巻会長からは、「今回、3年間の研究プロジェクトの成果として最終的なマニュアルを紹介いただく。さらなる研究の必要性があることから、病害分野の英知を活用し令和4年度から新しいプロジェクトも始まるので、さらに優れた結果が出てくるのではないかと考えている。それを期待しつつも、ここで得られた情報をもとに理解を深めていただいて、令

---

和4年度のサツマイモ栽培がうまくいくことを期待している。」との挨拶があった。

### (1) 講演

サツマイモ基腐病の発生生態と防除対策(令和3年度版)について、研究統括者である小林有紀氏が、令和2年度版マニュアルから改定された内容を中心に説明を行った。なお、サツマイモ基腐病の発生生態と防除対策(令和3年度版)のパンフレットは下記のURLからダウンロード可能である。

[https://www.naro.go.jp/publicity\\_report/publication/pamphlet/tech-pamph/151859.html](https://www.naro.go.jp/publicity_report/publication/pamphlet/tech-pamph/151859.html)

令和3年度版マニュアルは、ページ数が増えているため、冒頭に概要ページを作成しており、基腐病を防除するためには複数の対策を総合的に実施する必要があるため、概要ページで全体像を把握し、詳細に知りたい部分については赤字で示したページを確認するという使い方を推奨された。

また、マニュアルでは、「持ち込まない」「増やさない」「残さない」対策が示しており、未発生地域は「持ち込まない」が最も重要な対策である。初発生地域は基腐病菌を定着させない対策が必要で、病原菌による土壤汚染が進んだ状態からの防除は困難なため、早期発見し、「増やさない」「残さない」の対策が必要である、常発生地域では健全種苗の確保や圃場の病原菌密度を低減させる対策が必要である、との説明があった。以下、説明があったページ毎の内容を列挙する。

### ・病原菌の形態観察による診断 (p.16～p.17)

基腐病と類似した乾腐病を病徴から判別することは難しく、胞子の形態を顕微鏡で観察するか、菌を分離・培養し生育の速さから判別することは可能である。基腐病と類似病害の病徴と形態特徴について表にまとめてある。

### ・PCR法による診断 (p.20)

病変部からDNAを抽出し、基腐病菌・乾腐病菌に特異的なプライマーを使用したりリアルタイムPCRによって最短1日で基腐病・乾腐病の診断が可能である。

### ・健全種苗を確保するための防除対策 (p.24)

基腐病が本圃で発生すると、防除に多大な労力が必要となるため、定植育苗成時に徹底的な防除を行い、無病健全苗を生産し、圃場へ病原菌を持ち込まないように注意が必要である。

対策は自家種イモ、購入種イモ、購入苗を用いて育苗する3パターンにわけて解説している。自家種イモの場合、種イモ専用圃場を設置し、一般圃場とは区別して管理することを推奨している。種イモは基腐病未発生圃場から採取するのが原則であるが、常発生地域でやむを得ず発生圃場から採取する場合は異常株の抜き取りや薬剤散布を行い、収穫時には異常株の周辺からは採取しないようにする。自家種イモの連用は病害の蔓延を助長するため、バイオ苗やウイルスフリー苗を導入して定期的に更新する。

種苗は選別と消毒を行い、消毒をした苗床に植付を行う。苗床において基腐病が発生した場合は、採苗の中止が望まし

いが、やむを得ず続ける場合は発病株を種イモごと抜き取って処分し、耐性菌の出現リスクが低い銅剤の散布を実施する。黄色でマークしたページに詳細な説明がある。

・本圃における対策の基本方針 (p.25)

収穫時に基腐病による腐敗イモがなかった圃場では、基本対策を実施する。

腐敗イモの発生が1割未満だった圃場では、交換耕作や品目変更によりかんしょを連作しないことが望ましいが、やむを得ず連作する場合は、青果用なら抵抗性“やや強”の品種を導入し、早植え・早掘りを実施する。原料用は抵抗性“中”以上の品種を導入するか、抵抗性“中”未満の品種を作付けする場合は早植え・早掘りを実施する。

腐敗イモの発生が1割以上だった圃場では、青果用品種の栽培は難しい。原料用は抵抗性“中”以上の品種を導入し、発病状況をみながら早掘りを検討する。

なお、基本対策は抵抗性“中”以上の品種を作付けする場合でも実施する。生育期に発病株が数株確認された場合は、必ず収穫時まで周辺株に異常がないか注意する。収穫時または貯蔵後に、腐敗イモが数個でも確認される場合は、基腐病発生の有無を点検・診断し、次作へ伝搬させないように厳重に注意する。

・主要品種の基腐病抵抗性程度 (p.27～p.32)

用途ごとに品種の基腐病抵抗性程度を示している。当該データは、2021年に、基腐病甚発生圃場で実施した栽培試験の結果であり、抵抗性程度は、前年度同一圃場で実施した栽培試験の結果から定め

た指標に基づき評価している。

青果用は「べにまさり」「すずほっくり」がやや強で、「べにはるか」「高系14号」「ベニアズマ」はいずれも弱く、基腐病の発生が激しい圃場での栽培は難しいと考えられる。

焼酎原料用では、「九州200号」が最も強く、9月の収穫であれば外見健全な塊根が9割を占めた。一方、「コガネセンガン」はやや弱で、9月前半の収穫でも被害が激しく、外見健全な塊根は4割程度であった。

でん粉原料用では、「こないしん」「九州200号」「シロユタカ」の順に強いが、「こないしん」であっても、甚発生圃場では11月収穫で外観健全な塊根は3割程度まで減少した。「こなみずき」「ダイチノユメ」「コナホマレ」は弱であり、基腐病発生圃場での栽培は難しいと考えられる。

加工用では、「オキコガネ」、「タマアカネ」、「ベニハヤト」の抵抗性が強く、11月収穫でも外観健全な塊根が8割以上を占めた。

沖縄向け品種は、「宮農7号」が強く、「ちゅら恋紅」は弱かった。

・基腐病多発生地域における防除対策の実践による発生程度軽減事例 (p.33)

2020年度に種イモ・苗床・苗の消毒、圃場の排水対策を行ったが、基腐病の発生程度の改善は認められなかった。しかし、2021年度に連作の回避、抵抗性品種の作付け、薬剤の茎葉散布を追加したところ、無・少発生圃場の割合が増加し、中・多発生圃場がなくなる結果となった。

---

- ・基腐病多発生地域における対策マニュアルの実践と被害の発生推移 (p.34)

マニュアルで示した複数の対策のうち、適切な実施が3割程度の生産者の圃場では、基腐病の発病はあまり減少していないが、8割以上を適切に実施された生産者の圃場では、着実に発病が減少している。

- ・基腐病多発生地域における品種「こないしん」作付けによる発生程度軽減事例 (p.35)

抵抗性が“やや弱”の「コガネセンガン」を作付けした圃場では基腐病の発生が多く、“やや強”の「こないしん」を作付けした圃場では発生が少ないことがわかる。また、「コガネセンガン」を2019年から2021年まで連作した圃場では年々発生が増加しているが、2021年から「こないしん」を作付けした圃場では発生は減少した。

- ・基腐病多発生地域における夏作の休耕と品種の組み合わせによる発生程度軽減事例 (p.36)

「コガネセンガン」を2019年から2021年まで連作した圃場では基腐病が多発生しているが、2年間かんしょの栽培を行わず、2021年に抵抗性“中”以上の品種「こないしん」「シロユタカ」を作付けした圃場では、基腐病は無もしくは少発生となっている。

- ・圃場の衛生管理 (p.37)

苗床が汚染され感染苗が発生すると、すべての圃場に影響が及ぶことから、苗床の対策は極めて重要である。苗床では伏せ込みから長期間にわたって作業が続き、特に採苗開始後は本圃の定植に伴っ

て、繰り返し出入りを行うため、苗床消毒を行っていても再汚染の可能性が極めて高いと考えられる。再汚染のリスク軽減のため、苗床専用の長靴や手袋を用意することを推奨する。また罹病残渣を圃場周辺に放置すると、蔓や塊根から萌芽・発根し感染源となるため、圃場周辺の畔や法面には放置しない。

- ・温度処理による種イモ消毒 (p.42～p.43)

株基部に基腐病の病徴が出ていない種イモを採取し、貯蔵前に流水で水洗・選別し、なり首と尾部の切除を行った後に、蒸熱や温湯を利用して、48℃で40分間処理することで、基腐病の発生リスクを軽減できると考えられる。現場レベルの技術として普及するためには、まだ研究が必要である。

- ・苗の温度処理による基腐病抑制効果 (p.45)

苗も温湯を利用して、48℃で15分間処理することで、基腐病の発生リスクを軽減できると考えられる。ただし、苗の状態や品種によっては処理によりダメージを受ける場合があるので、苗は生育旺盛なものを使用し、品種については事前に予備試験を実施する必要がある。ただし、温湯処理は、つる割病に対しては防除効果が劣るため、つる割病発生のある場合は、温湯処理後に薬剤処理も実施する必要がある。

- ・基腐病発生苗床での苗感染リスク (p.46)

基腐病の発生苗床から採取した苗は先端からも菌が検出される場合がある。また、苗消毒で薬液に浸らない部位に基腐病菌の胞子を付着させたところ、基腐病の発生が認められたため、できるだけ広

い範囲を薬液に浸漬することで発病リスクが軽減できると考えられる。

・苗床の土壤還元消毒 (p.47、p.49)

米ぬかを土壤に混和し、ぬかるむまで灌水した後、地表面をフィルムで被覆し、およそ30℃以上の高い地温で湿潤状態を3週間から1か月維持すると、基腐病の発生を抑制できる。

・圃場の排水対策 (p.51)

基腐病は水を介してまん延するため、湛水した圃場での発病率が高く、降雨後に、「湛水させない」、「湛水時間を減少させる」、「圃場の一部の湛水に留める」ことで被害軽減につながる。表面排水対策と地下排水対策の両方を実施することで、圃場の湛水状況を大きく改善できる。

・体系防除 (暫定版) (p.57)

基腐病は薬剤の茎葉への散布だけでは防除できないため、苗消毒、排水対策、残渣処理、輪作など他の基本対策の実施が前提条件である。

定植後は発病株を除去し、周辺株へ銅剤を散布する。苗消毒による感染防止効果が低下する定植後5週目頃にアミスター20フロアブルを予防散布する。畝間に水がたまるような豪雨後や台風通過後は蔓延しやすいため、その前に薬剤の全面散布を行うのが望ましい。降雨前に散布できなかった場合は、降雨後に速やかに散布する。また、耐性菌の出現リスクを減らすため、薬剤は連続使用をせず、作用機作の異なる薬剤を交互に散布する。

・天地返しによる収穫後残渣対策 (p.65～p.66)

地表に近い位置に存在する罹病残渣

は、地中の深い位置に存在する罹病残渣よりも基腐病の感染源としてのリスクが高い。耕土層と心土層を入れ替える天地返しを行うことにより、基腐病菌感染のリスクとなる残渣量を減らし、発病を軽減できると考えられる。

・本圃における適切な土壤消毒方法 (p.67)

土壤が甚汚染状態にある圃場では、土壤消毒の効果は低いため、交換耕作や品目変更を第一に考える。土壤消毒を行う前に罹病残渣を圃場外に持ち出し、持ち出しできない残渣は、病原菌が薬剤に暴露されるよう、耕耘して十分に細断する。畝間の汚染土壤からも感染が生じるため、圃場全面を対象に実施する。

・土壤消毒と堆肥施用の組み合わせによる基腐病防除効果 (p.69)

まだ研究中ではあるが、土壤消毒後に堆肥施用を行い、土壤微生物の活性化を促すことで基腐病防除効果が高まる可能性がある。

・甚発生圃場における収穫後の冬期湛水による基腐病防除効果 (p.72)

農薬を使用せず圃場を湛水し還元状態にすることで、病原菌密度を低減させる研究も行っている。

最後に、「基腐病は種苗と土壤のどちらかが汚染されていると発生し、よく注意して観察していないと気づきにくく、いつの間にか病原菌を増やし拡散してしまう恐れがある。基腐病に特效薬はなく、単独の対策を実施しても防除は難しく、複数の対策を総合的に実施する必要がある。台風などにより隣接圃場にも拡散する恐れがあるため、基腐病対策は点ではなく面で、地域全

体で取り組んでいただきたい」とのまとめがあった。

## (2) サツマイモ基腐病に関するQ & A

農研機構 小林有紀氏、鹿児島県農業開発総合センター 西八束氏、宮崎県総合農業試験場 榎間義幸氏の3名より、事前に募集していた質問に対する回答を行った。質問および回答を表形式にまとめて紹介する(表1)。

## (3) パネリストからの情報提供

九州、関東のサツマイモ産地の農協、農業生産法人等の担当者、種苗供給業者のほか、農水省の担当者からの情報提供があった。

### ●南九州の産地

- ・ 3月に入り育苗も終盤、植付もスタートしている状況にあり、対策マニュアルや栽培暦の配布を行った。これから植付が本格的になるため、健全苗の選別や苗消毒の徹底に取り組んでいる。スマート農業実証プロジェクトで基腐病のセンシングによる早期発見が採択されたので、実用化に向けた取り組みを進めていく。
- ・ 栽培面では抵抗性品種「べにまさり」の作付け面積の拡大、排水対策・リビングマルチの活用を行っている。契約生産者へは早掘り推奨、発病前に加工に回すなど対策している。今後、九州では「べにはるか」「高系14号」の栽培は厳しくなるのではないかと考えており、安全な産地でこれらの品種を栽培し、九州では抵抗性のある品種の栽

培を行うことを考えている。

### ●関東の産地

- ・ 茨城県では幸いなことに基腐病の発病はなく、圃場への基腐病侵入防止を第一に取り組んでいる。3月には育苗期から植付期までの対策マニュアルを作成し、生産者を巡回しながら説明を行っている。ポスターなどで家庭菜園の方への注意喚起も行っている。
- ・ JAかとり管内だけではなく、千葉県の農業事務所、県内・県外のJAグループと情報交換・意見交換を行い、基腐病に関する知識を深めている。サツマイモを作付けしている生産者に対して、2月3月に講習会を実施計画していたが、コロナの影響により中止となったので、作成した資料を生産者に配布した。基腐病の脅威について、正組合員・准組合員にも広報誌を通じて広く周知している。ウイルスフリー苗の普及・定着にも取り組んでいくことを進めている。種イモによる育苗の状況把握、植付の把握のため栽培記録簿の様式を作成している。

### ●種苗メーカー

- ・ 緑肥や微生物資材の試験を行っていたが、いったん中止する予定。土壌の排水性が重要であると感じている。会社として、新品種の開発も行っているが、ラボレベルで既存品種や系統の接種試験を行い、抵抗性がありそうなものを選別し、圃場レベルでの試験を進めている。結果がまとまり次第、また公表したいと考えている。

## ●農林水産省

- ・ 現時点では、農研機構のマニュアルにある通り、総合的な防除しか対策がないことを認識していただければと考えている。品種開発や基腐病対策にも予算をつけて進めたいと考えている。効果が認められるような研究結果には迅速に予算をつけるなどの措置を実施させていただいた。現場の方に使っていただけるようにサポートしていきたい。

### (4) 座長による総括

小巻会長から「基腐病をいたずらに恐れる必要はないが、実態が何かということがわからないままに行っても、蔓延をとめることはできない。正しい情報を提供できるように引き続き活動していきたいと考えている。」との総括があった。

### (5) 日本いも類研究会（サツマイモ情報センター）の紹介

日本いも類研究会事務局長補佐の橋本より、主催団体の一つである日本いも類研究会の紹介と入会案内、令和4年度より新しく取り組むサツマイモ情報センターの設立とその活動内容について説明を行った。

## 3. 今後の取組み

### (1) 令和4年度サツマイモ基腐病情報交換会の開催

令和4年度も引き続き、2～3回程度、サツマイモ基腐病情報交換会を開催する計画である。

### (2) サツマイモ基腐病対策ポータル

サツマイモ基腐病情報交換会で寄せられた質問に対する回答集（サツマイモ基腐病Q&A）、関係機関等から発表されている資料・データへのリンク集などサツマイモ基腐病対策情報をサツマイモ情報センターのホームページ上にまとめている。引き続き、サツマイモ基腐病に関する情報の収集と、掲載内容の更新と発信に努める。

表1 サツマイモ基腐病Q & A

区分	質問内容	回答
基腐病の発生生態	基腐病菌は完全に枯死している残渣には感染、滞留しないのか？	枯死した羅病残渣でも6か月以上感染力を維持している。マニュアルp.63の表19を参照。それ以上の生存期間はまだ研究中の段階だが、乾燥状態では生存期間が伸びることがわかっている。
	先行して発生した海外での対策や状況(被害程度)、抵抗性品種の利用状況を教えて欲しい。	基腐病は1912年にアメリカ、1990年代にブラジル、2008年に台湾、2014年に中国などで発生が報告されている。羅病率は41～95%または収量80%減など、いずれも大きな被害が生じたようである。しかし、アメリカでは現在、基腐病は適切な衛生管理が日常的に行われていれば問題にならない病気とされている。効果的な防除対策として無病種イモの選抜、種イモの消毒、苗床や本圃における輪作をあげている。台湾でも基腐病の発症は激減しており、健全苗の使用、発病株の抜き取り、発生圃場の湛水、イネなどとの輪作を推奨している。中国ではソルガムやトウモロコシとの輪作を推奨し、ブラジルでは抵抗性品種の存在がわかっているが被害状況は不明。
	発生ほ場で収穫した芋は、症状が認められなくても味や匂いに違いがあるのか？	外観健全な感染イモは、味やにおいの違いはなく見分けられない。そのため、種イモに混じったり、販売先で腐敗したりするのが問題となっている。マニュアルp.40を参照に選別を行う。
	基腐病の蔓延には、気温上昇等の気候変動が要因となっているのか？	マニュアルのp.15を参照。疫学調査を3カ年行ってきたが、発生要因は、過去に発生した、表面排水が不良、積算降水量が多いの3つが大きく影響している。気候変動にどこにかかってくるかはわからないが、現時点でわかっているのは以上の通りである。
	基腐病には、水媒以外にどのような伝播様式があるのか？	健全株と羅病株が畑で接触するパターンが多い。コンテナについた土によって媒介されるかは現在のところ不明である。
	発生県では、発生ほ場で罹病した蔓や残渣、塊根を、どのように処理しているのか？	宮崎県としては、分解されにくい部分もあるので、収穫時に残渣を持ち出すことを推奨している。少量の場合、残渣はかんしょを植え付けない畑にすき込むか、未使用地に隔離している。かんしょ畑からはできるだけ離れた場所で処理したほうが良い。大発生した場合は、産業廃棄物として破棄してもらう必要があるが、自治体が焼却処理などの補助を行っているケースもある。あとは微生物資材をつかって、残渣の分解促進を行っているケースもある。



区分	質問内容	回答
国内での被害状況	発生県における被害面積は、具体的にはどれくらいの規模なのか？	鹿児島については、基腐病に限らず一株でも立ち枯れ症状が認められる圃場が県内のかんしょ栽培圃場の約7割で見られる。宮崎県は、基腐病が発生したと判断しているのは県内作付け面積の約6%。被害が激しい産地では、収穫が皆無になる圃場も見受けられている。掘り取り時に外観健全とみえても、貯蔵中に腐敗していくものもあるため、被害状況の実態把握は難しいところがある。
農薬による防除・土壌消毒	畝間からの感染を防ぐ薬剤の開発状況はどうなっているのか？	他の土壤病害に効果がある薬剤を中心に圃場レベルで研究中である。登録がわかった段階でまた公表する。
	土付きコンテナによる集出荷で、使用後に資材消毒剤（ケミクロンG等）散布で洗浄すれば、菌は死滅するのか？	付着した土壌や残渣によって基腐病が伝播する可能性は高いと思われるが、水などで洗い流すことが重要だと考えられる。塩素剤は効果はあると思われるが、土壌や有機物にふれると、効果が速やかに低下する。消毒よりも水洗による除去を行うほうが大事だと思われる。
	登録農薬を増やさないと耐性菌が出るのが危惧されるが、基腐病に対する農薬の開発や承認状況を教えて欲しい。	農薬メーカーから情報を得ながら圃場レベルで研究中である。登録がわかった段階でまた公表する。耐性菌が出たという事実は今のところないが、ベンレートやアミスターは過去の知見より、耐性菌がでやすいことがわかっているので連用を避けるのが望ましい。輪作や抵抗性品種、早掘りなどの他の防除法を組み合わせていくことが重要だと考えている。
	指定農薬であるアミスターの防除効果はどうか？	アミスターの防除効果は、試験では防除価70～88の数字が出ており、発病抑制効果はあると考えている。ただ、基腐病の発生部位は地際部なので、株間がおおわれる生育段階だと効果が落ちていくと思われる。株元にしっかりかかるように処理する必要がある。
	薬剤散布の普及にかかる普及指導センターとの連携の状況を教えて欲しい。	宮崎県では、これまで虫害対策が中心で殺菌剤の散布はあまり行われていなかった。病害防除のために薬剤散布を行う必要性の周知を行っている。
	サツマイモ苗のベンレート処理のタイミング（採苗直後と定植直前）及び効果的な処理方法を教えて欲しい。	基腐病は傷が発病を助長するため、採苗後すぐに処理することを指導している。つる割病も採苗後すぐに処理したほうが効果は高いことがわかっている。バケツに薬液を作り、採苗後にすぐに漬けるような方法を検討し、マニュアルで提案している。
	耕種・生物的防除	種芋の蒸熱消毒について耐熱性のある病気（菌）と、芋に障害が起きる温度について教えて欲しい。

区分	質問内容	回答
耕種・生物的 防除	無農薬で効果の高い苗消毒方法はないのか？	苗質がしっかりした苗を使うことが前提ではあるが、48℃・15分の温湯処理で基腐病の発生を低減したという沖縄でやられた試験事例がある。温湯処理ではつる割病の病原菌が残るため、現時点では無農薬での対応は難しいと思われる。
	抵抗性のある新品種の来期作付けは困難とのことだが、現時点での進捗状況を教えて欲しい。	「コガネセンガン」よりも抵抗性が強い焼酎・でん粉原料用の「九州200号（みちしずく）」は今期から作付けが始まる。来年以降、種イモ1トンは提供できるように努力をしている。また、青果用の「九州201号」は次年度の品種登録出願を目指している。食味加工適性の点では、既存の主力品種に及ばず、現在求められている高品質のニーズに十分に対応できているとは言えないが、基腐病に対しては強い抵抗性を持っている。
	残渣量によると思うが、輪作は1年おきでも効果はあるのか？	研究中ではあるが、1年経過した残渣からリアルタイムPCR検査を行ったところ、それなりの基腐病菌濃度があった。感染力という面では不明である。輪作を行ったとしても、かんしょ栽培時には健全苗の使用や定植前の苗消毒、農機具の洗浄、圃場の排水対策を同時に行っていくことが重要である。
	輪作が進まない要因は、生産地の環境なのか、農家の資本装備（機械化等）なのか？	種イモからの持ち込み、周辺圃場の菌密度が高く、周囲からの飛び込みの影響が大きく、生産地の環境の問題だと考えている。
	収穫後の表土の残渣分解対策としてフレールモアの使用が示されているが、他に効化的な機材等はないか？	試験では「フレールモア」しか使っていないので、他の機械については回答できない。重要なことは、土壌微生物による残渣分解には地温・水分が必要の為、収穫直後に実施する。また、土壌消毒を行うことを考えると、残渣内部の病原菌が薬剤に暴露されるよう、できる限り残渣を小さくすることが重要である。
	青果用品種では、べにまさりがやや抵抗性とのことだが、同品種を親に育成された品種ではどうか？	「べにまさり」が親の品種には、農研機構育成の「すずほっくり」、民間育成の「シルクスweet」がある。「すずほっくり」は抵抗性が認められているが、シルクスweetの抵抗性程度は現在のところ不明である。
	土壤に散布する微生物資材は効果があるのか？	多発圃場において効果が認められる微生物資材はない。今後、発生条件や場所によっては効果が認められるかもしれないが、現時点では不明である。
	前作の発病程度や残渣の分解促進、輪作年数等、次作以降に影響を与える要因や対策について、新しい知見はないか？	汚染状況や残渣と発病の関係について未だデータを蓄積中である。基本対策をしながら、抵抗性のある品種を使うことで発生が減少している。作型の前進化も軽減事例となっている。

区分	質問内容	回答
耕種・生物的 防除	種芋の洗浄・消毒や蒸熱処理・貯蔵で水に浸かることにより、貯蔵性や萌芽性には影響しないのか？	マニュアルに示した方法であれば今のところ大丈夫と考えている。収穫から貯蔵中の取り扱い、品種特性、伏せ込み方法など今後も十分な検証を行っていく必要がある。
	南九州では1年休作しても発病すると聞いたが、周りの環境の影響なのか？	海外でやられているように2年以上が推奨される。輪作を行ったとしても、かんしょ栽培時には健全苗の使用や定植前の苗消毒、農機具の洗浄、排水対策、抵抗性品種の利用を行っていくことが大事である。
	病原菌に汚染された土壌の回復方法はあるのか？	菌の特性から考えると、かんしょ以外の作物を栽培していくことである。
	水稲のいもち病抵抗性品種のような、品種育成は可能なのか？	まったく感染しないといった免疫性や感染を広げることのない真性抵抗性については研究段階であり、今後の可能性については現時点では不明である。
	土壌還元消毒（糖含有珪藻土）による効果を確認した試験事例はあるのか？	糖含有珪藻土を利用して試験を苗床で行った結果、菌の検出がなくなった事例がある。糖含有珪藻土について試験を重ねていく予定である。
検査技術	リモートセンシングによる病害発生の判別は、蔓が伸びる前なのか、栽培期間全体で可能なのか？	植付から圃場を覆うまでの発病初期での判別と、生育中期から収穫までの被害の広がりの評価の両面で検討を進めている。
	基腐病の簡易診断キットはあるのか？	LAMP法乾燥試薬 サツマイモ基腐病検出キットが株式会社ニッポンジーン マテリアルから販売されている。また、マニュアルのP.16～22に菌の形態観察やPCR法による診断方法を記載しているので必要に応じて参照して欲しい。
その他	小規模の栽培者や農業者以外（家庭菜園等）への注意喚起や発生時の対応について、何がどの程度まで必要か、先行事例があれば教えて欲しい。	早く発見して早く対応することが重要である。基腐病の特徴のある写真を掲載したリーフレット等で広く紹介する、見つけた際にどこに連絡するかを明確にし、速やかに確定診断できるようにしておくことが重要だと考えている。市民農園では、参加者にリーフレットを配布し、技術員が見回りを行うようにしている。

※2022年3月28日時点の情報です。内容は今後変更となる場合があります。